

尊敬されない教師

1. 教育を考える一言

「もしほんとうにすばらしい教師であったなら、子どもは私のことなど思わないかもしれないと私は思います。あの仏様の指のような存在でありたいと思います。」

2. 背景

「仏様の指」という説話があります。たくさんの荷物を積んだ車を引いた男が、ぬかるみにはまってしまいます。懸命に車を引いてもぬかるみを抜け出せない男の様子を見た仏様が、その指で後ろから車に触れ、その瞬間に車はぬかるみから抜け出しました。しかし、ぬかるみから抜け出すことのできた男は仏様の指の力にあずかったことに気づかず、そのまま車を引いていってしまったという話です。

大村はま（1973）は、この説話を紹介し、教師の本懐について述べています。冒頭の言葉は、そこで語られているものです。学校という場で学び、身につけたものを自分の能力と思い、自分の磨き上げた実力であると思って、自信に満ちた態度で次の時代を背負ってほしいということが述べられています。

そして、この章は、「みんなが自分の力だと信じ、先生のことなんか忘れてしまってくれば本懐であるとは思うのです。」と締めくくられています。

3. 考察

実は、この言葉と非常に似た言葉を別の場所でも聞いたことがあります。それは、私がスクールカウンセラーをめざしていた頃、私の通う高校に勤務していたスクールカウンセラーの方から聞いた言葉です。その方は、カウンセラーはクライアントから「先生のおかげで悩みが解決した」というように思われたい存在であるべきであり、クライアントが「自分自身の力で立ち直った」と思えるような関わりをしなければならぬとおっしゃっていました。

私は、教員やカウンセラーといった、人の成長、特に子どもの成長に関わる仕事がしたいと考えてきました。しかし、そこには「先生のおかげで」と慕われたい気持ちや、尊敬されたい感謝されたいという気持ちが潜んではいないだろうか、心の底から子どもの成長を喜べる存在になれるだろうか、という問いをもつきっかけとなったのが、これらの言葉でした。

今では、私は中学校の教員をめざすようになりました。これらの言葉を胸に、「子どもに思われたい教師」、極端な言い方をすれば、「尊敬されない教師」でありたいと思います。

引用参考文献

大村はま『教えるということ』共文社、1973年